原著論文

無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化¹

舩 本 直 文 (首都大学東京)²

本 間 恵 子 (首都大学東京)³

Abstract

Olympic legacy study became popular in recent years, especially towards the 2012 London Olympic Games. One of the reasons was that the International Olympic Committee (IOC) required the Organizing Committees for the Olympic Games (OCOGs) to submit the Olympic Games Global Impact (OGGI, later OGI) study from the 2008 Beijing Games. The OGGI/OGI program was created aiming for generating many positive effects (i.e. 'legacy') in three aspects, that is, economic, environment and socio-cultural areas, by hosting the Olympic Games. Host cities must collect the data for these three aspects required by the OGI and submit four reports in twelve years.

It is difficult to categorize Olympic legacies precisely; however, there are two types of legacies: tangible and intangible. In the OGI study, intangible legacies should belong to the socio-cultural area in most cases. Nevertheless, the socio-cultural indicators do not refer to understanding the Olympism, three pillars of the Olympism (i.e. sport, culture and environment), the Olympic values (i.e. excellence, friendship and respect) and Olympic Movement. It is clear that such intangible legacies are important even though they cannot be measured in numerical terms.

In order to reconstruct intangible legacies of the Olympic Games, it is necessary to incorporate positive mind aspect such as dream, hope, vigorousness, solidarity, cohesion, identity and national identity through sports. In addition, it would be important to focus on the behavioral culture aspect by promoting the peace movement and understanding philosophy of peace and social values such as equality, fairness, justice, and human rights.

¹ Intangible Olympic Legacies: What is the mind aspect of the Olympic culture?

² Naofumi MASUMOTO, Tokyo Metropolitan University, 1-1, Minami-Osawa, Hachioji, Tokyo 192-0397, JAPAN

³ Keiko HOMMA, PhD candidate at Tokyo Metropolitan University, 1-1, Minami-Osawa, Hachioji, Tokyo 192-0397, JAPAN

Keywords: Olympic culture, Olympic Games Impact Study (OGI), Mind aspect of the Olympic culture, Olympic values, Paralympic values

**キーワード：オリンピック文化，OGI 研究，オリンピックの精神文化側面，
オリンピックの価値，パラリンピックの価値**

研究の背景

2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会（以降、2012 ロンドン大会）を機に、多くのオリンピックのレガシー研究が公表された。その研究対象は、都市再開発、スポーツ実践、交通改善、環境保護、スポーツ施設（競技場）、観光、学校体育など幅広い。このような研究の他に、2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会（以降、LOCOG）やイギリス政府の文化・メディア・スポーツ省 Department for Culture Media & Sport (DCMS)、イースト・ロンドン大学といった大学のスポーツ研究機関によるレガシー研究のレポートも多く出された¹⁾。

こうしたレガシー研究輩出の背景には、オリンピック開催によって何が残るのか・何を残すのかといったレガシーへの関心が近年広まってきたことがあげられる。また、オリンピックを機に開催都市や地域、開催国に対して長期的なプラス効果を望み、否定的あるいは予期しないようなマイナス効果を避けたいという国際オリンピック委員会（以降、IOC）の意図が存在すると推察される²⁾。このような傾向は、開催都市や将来の招致都市においても見られ、オリンピック開催によるプラス効果期待の願望の現れと見ることもできる。その一方で、オリンピック開催には多額の費用がかかるため、マイナス効果をできるだけ少なくしてプラス効果を生むようにすることはオリンピック・パラリンピックの組織委員会にとって社会的責任とも言える。しかしながら、既存のレガシー研究では、

経済や都市インフラ、あるいはスポーツ施設など目に見えるプラス効果としてのレガシーへの関心が高く、目に見えないオリンピックの文化的側面や精神的側面への視点に欠けていると言っている。

ここでオリンピック・レガシーの精神的側面に注目する理由は以下の通りである。オリンピック現象を一つの文化総体と見なすならば、それは都市環境やスポーツ施設などの社会制度面だけでなく、オリンピック・スポーツ競技やボランティア等のオリンピック事象を取り巻く行動面とそれらの行動を支える価値観などの精神的側面への視点を欠かすわけにはいかない。そこで本研究では、既にスポーツを文化と見なし、そのスポーツ文化を精神文化的側面、身体文化的側面、社会（制度）文化側面の3側面の複合したものを見なす「スポーツ文化複合理論」³⁾に依拠して、中でも精神文化的側面に着目して無形のオリンピック・レガシーに関する議論を進めることにする。

本研究では、先ずこのようなレガシー研究の動向を概観し、最新の動向を把握する。次いで、IOCが開催都市に義務づけたOGGIまたはOGIの評価研究レポートの指標を吟味する。それは、それらの評価すべき指標群から、オリンピックが都市に及ぼす多大な影響がレガシーとして想定されていると考えられるからである。このような考察から、オリンピックの持つ精神文化的側面が現在どのようにOGIレポートで評価され、ひいてはオリンピック・レガシーとしてどのように位置づけられているかを明らかにしようとするのが本研究の目的である。さ

らに今後の研究課題として、無形のレガシーとして考慮すべき精神文化的側面の内実とそれらの重要性および今後の研究の方向性について提言しておきたい。

1. IOC によるオリンピックの影響評価

オリンピック大会が開催地にもたらす効果・影響は非常に大きく、開催都市のみならず招致都市にも大きな影響を与える。そのため、IOC はシドニー大会後の 2001 年からオリンピックの効果・影響を測る指標づくりに着手してきた。また 2002 年には、IOC オリンピック研究センター (Olympic Study Centre) とバルセロナ自治大学 Autonomous University of Barcelona によってシンポジウム「The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000」が開かれた。このシンポジウムでは、レガシーの定義づけを試みるとともに、オリンピック大会が開催地 (都市、地域、国家) に何を残したのかという観点からディスカッションが繰り広げられた⁴⁾。このシンポジウムの成果も踏まえ、2002 年のメキシコシティで開かれた IOC 総会で「legacy」という言葉がオリンピック憲章 (2003 年版) に初めて明記されることになった。IOC のミッションの条項には次のように記されている:「to promote a positive legacy from the Olympic Games to the host cities and host countries」⁵⁾。

さらに IOC は、2003 年にオリンピック開催による効果・影響を測る指標「OGGI (Olympic Games Global Impact) Study」を導入し、各大会の組織委員会 (OCOG) に対して研究レポートの提出を義務づけるようになった。最初にこの OGGI study レポートの提出を義務づけられたのが 2008 年の北京大会である⁶⁾。この OGGI study により、北京大会組織委員会 (BOCOG) は 2005 年に最初のレポートを IOC に提出したとされているが公表されていないようである⁷⁾。続くバンクーバー冬季大会組織委員会

(VANOC) は、経済、社会、環境の 3 分野にわたる 154 の指標について、オリンピック招致 2 年前から開催 2 年後までの 11 年間を対象に、4 本の影響評価レポートを提出することになった⁸⁾。その後、2007 年に Olympic Games Impact (OGI) 研究に名称が変わるとともに、経済、社会・文化、環境の 3 分野にわたる約 120 項目⁹⁾の指標に見直され、調査期間も 12 年間に変更され、2012 年ロンドン大会の影響評価研究に適用された。この 1 年間の延長は開催後の対象期間延長であり、開催後 2 年から 3 年に延長された。その後も OGI は見直しが行われており、2012 年時点では主報告書の提出は 2 回 (オリンピック開催の 48 か月前と開催 36 か月後) となり、途中で中間報告書を 2 回提出する形となっている¹⁰⁾。

2. レガシーの定義

2.1. その定義と類型

オリンピック大会の開催は、開催都市・国家にさまざまな効果・影響を与える。経済効果や観光、インフラ整備といった有形 (tangible) の効果・影響のほかにも、スポーツ振興やスポーツ政策および教育、またオリンピックというイベント体験がもたらす精神的な効果・影響といった無形 (intangible) のものまで、その範囲は幅広く、区別も難しい。日本では荒牧 (2013) と Homma and Masumoto (2013) がそのレガシー概念と世界の研究動向をまとめている¹¹⁾。

また、Cashman (2003) は、2002 年に開催されたレガシー・シンポジウムにおいて、オリンピック開催による効果・影響が大きくなったのは、大会の肥大化とスポンサーやメディアの関与が強まった 1984 年大会からと述べている。そして、オリンピック大会が開催都市・国に与えるレガシーとして以下の 6 つをあげている: 経済的レガシー、物理的な構築環境レガシー (施設など)、情報と教育レガシー、市民生活と政策・

文化、スポーツレガシー、シンボルと記憶・歴史レガシーである¹²⁾。

こうした効果・影響の中にはポジティブなものやネガティブなものが混在する。開催都市にとってみれば、潜在的なレガシー、つまりオリンピック大会が残す無形のレガシーや予想外の効果も含めたレガシーへの期待こそが招致の動機になっているといえる。

2.2. IOC によるレガシー定義参照

IOC のレガシーに対する最新の公式的な立場はレガシー・ハンドブックに示されている。それによると、レガシーは5つのカテゴリー(スポーツ、社会、環境、都市、経済)に分けられる。さらに有形・無形の両レガシーに関しては、次のように示している。有形のレガシーには、新しいスポーツ施設・設備や交通インフラ、都市再開発、街の美化など、都市の魅力や住民の生活水準の向上につながるものがあげられる。無形のレガシーとしては、国家威信の高揚感、新しい職業技術の獲得や向上、開催国住民の満足感、自国文化・遺産の再発見、環境意識の向上などがある¹³⁾。

従来、経済効果や観光客の増加はオリンピック開催による影響もしくは効果(英語では impact)と表現されていた。しかし、2000 年

代以降レガシー(legacy)への関心が高まったことを受け、同様の文脈で使われていた「impact」と「legacy」という言葉の使い分けについて IOC は 2011 年に定義を行った。「Olympic Games: Legacies and Impacts Bibliography」(2011 年発行)によると、「impact」は従来から広く使われてきたが、「legacy」との使い分けからすると比較的短期的な悪影響を示唆する場合に使われ、一方、「legacy」は比較的長期的な良い効果を指す場合に使われる傾向がある。このような IOC の定義を参考にレガシーとインパクトを端的に整理すると図 1 のように整理できる。

インパクトとレガシーの区分はあくまでもオリンピック競技大会の開催という文脈における傾向を指すものであって、単純に言葉そのものを定義しているわけではない。しかしながら、インパクトとレガシーという言葉を用いるような概念に基づいて使い分けることは有用であろう。既に述べた通り、レガシーは有形レガシーと無形レガシーに2分できると考えられる(個別のレガシーについては研究者によって有形か無形か意見が分かれる場合もある¹⁴⁾)。そのため、オリンピック・レガシーとは「オリンピック開催を契機とした有形・無形の長期的で継続的な良い効果」ということに整理できる。

(参考：Olympic Games: Legacies and Impacts Bibliography, IOC, 2011)

図 1. レガシーとインパクトの概念関係

3. 有形・無形のレガシーと OGI 指標

IOC のオリンピック研究センター (OSC) とバルセロナ自治大学の共同開催によるレガシーに関する国際シンポジウムの報告書 (IOC, 2003) の結論では、レガシーには建築物や都市計画、スポーツ施設、観光客増加、経済効果といった認識されやすい効果だけではなく、認識されにくいものの重要なレガシーがあるとし、有形と無形のレガシーについて以下のように記述されている¹⁵⁾ (日本語は著者等の訳)。

In particular, it is necessary to point out the importance of so called intangible legacies, such as production of ideas and cultural values, intercultural and non-exclusionary experiences (based on gender, ethnicity or physical abilities), popular memory, education, archives, collective effort and voluntarism, new sport practitioners, notoriety on a global scale, experience and know-how, etc. These intangible legacies also act as a driving force for the tangible ones to develop a long-term legacy of the Olympic Games, affecting, not only the host cities, regions and countries, but also the athletes, the spectators, the Olympic Movement and society as a whole.

特に、いわゆる「無形のレガシー」の重要性に注目する必要がある。無形のレガシーには、例えば、知識や文化価値の創造、異文化や垣根 (性別・民族・身体能力などの違い) を越えた体験、記憶の共有、教育、アーカイブ、努力の結集やボランティア精神、スポーツ実践者の増加、国際的な評判、経験やノウハウなどがある。こうした無形のレガシーは、有形レガシーの原動力となってオリンピック開催による長期的なレガシーを形成し、開催都市・地域・国のみならず、選手や観客、オ

リンピック・ムーブメントや社会全体にも影響を及ぼしていくのである。

無形のレガシーが有形レガシーの原動力となる点については、荒牧 (2013) も強調している。そこで、OGI 研究の対象項目に無形のレガシーに関するものがどれくらいあるのかを調べてみた。前述のとおり、OGI は経済、社会・文化、環境の3分野を対象としているが、ここでは社会・文化に関する項目について取り上げる。以下の表は、2010 年バンクーバー冬季大会以降の開催都市に求められるようになった社会・文化関連項目をまとめたものである。対象項目としてテーマ (Thematic topics) と焦点領域 (Focus areas) が設定されており、テーマ項目は必須項目だが、焦点領域の内容は開催都市・国の状況に応じて変更が可能となっている。社会・文化分野では、表1のとおり、12のテーマが設定されており、各テーマについてその焦点領域の40指標が提示されている。

この表1によれば、政治や社会制度、住宅やアクセシビリティ、反ドーピングやスポーツ参加、健康や安全など社会・文化側面の指標が列挙されている。文化プログラムやオリンピック・パラリンピック教育などオリンピック特有の文化事象もこの分野の指標として取り上げられているが、無形のレガシーに関する項目としては、オリンピック教育、開催都市イメージなどごくわずかしかなしいってよい。特に、オリンピックへの理解やオリンピック精神、オリンピックの価値や平和運動など、「スポーツ文化複合理論」でいうところの「精神文化的側面」に関わるレガシーに関心が示されていないと結論づけることができる。

4. スポーツ文化複合理論の視点

スポーツを文化として捉えることはほぼ一般化していると言って良からう¹⁶⁾。しかしながら、

表1. 社会・文化分野の対象項目一覧

分類番号	テーマ	焦点領域
So01	政治・社会・法的組織	・オリンピック・パラリンピックに関連する投票
		・公共政策の延期・放棄
		・圧力団体
		・事例分析
So02	公共建築物や会場へのアクセスのしやすさ	・公共建築物におけるアクセス基準の順守
		・オリンピック会場におけるアクセス基準の順守
		・事例分析と成功例
So03	世論とコンサルティング	・世論調査
		・ステークホルダーとの相談
		・事例分析と成功例
So04	マイノリティグループ（少数派）の参加促進	・マイノリティグループのオリンピックへの参加
		・マイノリティや先住民族のプロモーション
		・障害を持つ人々に対する社会の認識
		・事例分析と成功例
So05	社会発展	・貧困と社会的疎外
		・教育レベル
		・犯罪率
		・衛生
		・栄養
So06	文化	・事例分析と成功例
		・開催都市の文化活動
		・オリンピック文化プログラム
		・オリンピック・パラリンピック教育活動
So07	スポーツ・フォア・オールとエリートスポーツ	・事例分析と成功例
		・スポーツや身体活動
		・体育や学校スポーツ
		・スポーツ施設
		・トップレベルの男女選手
		・開催実績のある主要スポーツイベント
So08	アンチドーピング・コントロール	・全国的なアンチドーピング・プログラム
		・事例分析と成功例
So09	オリンピック開催に伴う住宅供給	・オリンピック開催に伴う住宅供給
		・事例分析と成功例
So10	メディアと開催都市イメージ	・開催都市のメディアイメージ
		・事例分析と成功例
So11	障害を持つアスリートへの専門的なスポーツ教育	・障害を持つアスリートへの専門的なスポーツ教育
		・事例分析と成功例
So12	健康と安全	・健康・安全管理の実践
		・事例分析と成功例

(参考：Technical Manual on Olympic Games Impact Study (5th Ed.) , IOC, 2010)

その文化的特質を分析する際のフレームワークはまだ一般化していないといえる。スポーツを文化としてとらえることが前提とされるスポーツ人類学の研究手法では、「スポーツ文化複合理論」が用いられることが多い¹⁷⁾。その代表が寒川のスポーツ文化論である。彼の「スポーツ文化複合論」では、前述の注3)に示したように、スポーツ文化を精神文化、社会文化、技術（物質）文化の3側面の要因が複合したものと見なしていた。

ここでは、「身体文化」側面を「行動文化側面」と改称し、「身体文化」のように単なる身体技法や人間の技術によって制作された物質的なものだけでなく、オリンピック事象に関わるスポーツ競技やボランティア活動など幅広い行動を包括する概念として用いている。また、「社会文化」という曖昧な概念ではなく、オリンピックを文化としてとらえた際に、そのような社会事象を価値づけるとともに幅広い行動を再生産していくような社会システムとしてとらえるために「制度文化的側面」という表記を用いている。

このようなスポーツ文化複合理論を援用すれば、オリンピックを一つの文化として捉えることができるのみならず、そのオリンピック文化を諸要因間が相補関係にある複雑な構造体としてとらえることが可能となる。そうすると、オリンピックの無形のレガシーというものは、精神文化側面に位置づけられることになる。その内実には、例えば、オリンピズム、オリンピズムの3本柱（スポーツ・文化・環境）、オリンピックの価値（Olympic Values）、オリンピック運動などへの理解、オリンピックの平和思想などが含まれることになる。

このスポーツ文化複合という理論における複合性に着目すれば、以下の図2のような関係構造にあるとあって良からう。

まず、これらのオリンピックに関わる価値やオリンピズムなどのような精神文化的側面は、

空中に浮遊するガイストのように単独で存在するわけではない。これらの精神文化的側面は、オリンピックの競技や文化プログラム、聖火リレーやボランティアなどの行動文化的側面を意味づけ背後から支えるものでもある。そのために、精神文化的側面は行動文化的側面から推察して確認できるものであり、両側面はそのような相補関係にあるものである。また、オリンピック教育や文化プログラム、あるいは4年ごとの競技大会の開催ルーティン、はたまたそのような行動を支えるスポーツ（オリンピック）政策などの諸制度は、オリンピックの価値やクーベルタンの主張するオリンピズムという精神文化的価値が反映されたシステムとして存在するものである。ここでも、精神文化側面によって支えられた制度文化的側面とその制度文化的側面から推察されて確認される精神文化的側面という相補的な関係性が見て取れる。当然ながら、様々な行動文化的側面は制度文化的側面によって規定され、オリンピック特有の精神文化的側面は制度文化的側面によって継承・伝達され、望ましいものとして再生産される、という相補的な複雑な関係構造にある。

ここでは、どのようなオリンピックの文化的要素がどのようなカテゴリーに該当するかということが問題なのではなく、オリンピック文化というものがこのような諸要因の相補的・複合的な関係であるという認識が重要であり、しかも、

図2. スポーツ文化複合理論とオリンピック文化

オリンピック・レガシーというものに焦点を当てる際に、このような無形のレガシーである精神文化的側面への視点をおろそかにするわけにはいかない、ということが明らかにされることに意味があるのである。そのために、OGI研究が示すような経済指標、環境指標、社会的指標などの一見明示的で数値的な指標や、さらには最高のパフォーマンスや施設などのハード面のレガシーにのみ着目してしまうと、無形のレガシーである精神文化的側面を見落としてしまいかねない、ということに気づくことが重要なのである。

さらに、このオリンピック文化の文化複合という関係図を発展的に検討することによって、オリンピック憲章の「オリンピズムの根本原則」にも規定されているオリンピック理念の一つである平和運動という重要な側面が、OGI研究の指標にも取り上げられていないことを指摘できること以上に、オリンピック・ムーブメントが目指す平和的価値の実現という精神文化に則って、聖火リレーやオリンピック休戦宣言などのオリンピック特有の平和運動という行動文化的側面が展開されているという構造にある、ということを確認することが必要なのである。また、そのような平和的価値という精神文化に裏付けられて、聖火リレーの継続的实施や開会式での平和の象徴である放鳩を義務づけるオリンピック憲章のプロトコルの存在、及び、国連総会におけるオリンピック休戦決議の採択などのオリンピック特有の制度文化が存在することも理解されなくてはならない。そのため、オリンピックにおける平和運動にあっても、その制度文化的側面と行動文化的側面の複合的・相補的關係性というものも視野に入れて、精神文化的側面としての平和のレガシーに注目することが重要である。つまり、いわゆるオリンピックの平和意識に関するアンケート調査による精神文化的側面の確認だけでなく、オリンピック特有のどのような平和運動の行動がどのような制

度文化によって保証されているか、それはどのような精神文化によって支えられているのか、ということを確認することによって推察できる精神文化的側面の把握が重要であるといえる。

まとめと今後の発展的問題

以上の考察から、オリンピズム、オリンピックの価値、オリンピック運動の意味など、オリンピックの持つ様々な精神文化的側面は、無形のレガシーとして位置づけられるが、IOCが大会組織委員会(OCOG)に義務づけている影響評価研究レポート(OGI)にはまだ十分に位置づけられていないことが明らかになった。

さらに、このような精神文化的側面は単独で浮遊して存在しているものではなく、行動文化的側面を裏づけし、制度文化的側面を支えるような思想的な位置づけにある複合的な関係を持つものでもある。そのため、オリンピック・レガシーの再生産制度やそのための行動様式などの2つの文化的側面から読み取る必要があるといえる、ということが明らかにされた。

さらに、このようなオリンピック・レガシーの精神文化的側面について、様々な解決すべき課題が残されている。その一例を挙げておくと、それらの問題は今後の研究課題として指摘するととどめておき、別稿に譲りたい。

1. オリンピック・レガシーの内実への探求だけでなく、そのレガシーの継承者は一体誰だれか? という問いが定立できる。一体誰から誰へと継承されていくのか? 誰が遺す主体であるのか? 誰が受け継ぐ主体であるのか? という問いである。
2. オリンピック・レガシーの精神文化的側面の内実として、スポーツを通じた夢、希望、活力、連帯、凝集性、アイデンティティなどポジティブな精神性も無形のレガシーに含まれる必要があると思われる。また、平等、公正、正義、人権などの社会的価値

は精神文化的側面のレガシーに含まれるのであろうか？ フェアプレーや反ドーピングなどの倫理的価値もここに含まれているはずであるが、そのような問題に対する回答は未だ示されていない。

3. また、オリンピックの精神的側面の内、代表的なものであると考えられるオリンピックの価値（Olympic Values）は、2008年頃からIOCによって「卓越 excellence, 友情 friendship, 尊重 respect」の3つとされているが¹⁸⁾、2012年ロンドン大会ではLOCOGによって初めてパラリンピックの価値（Paralympic values）というものが掲げられた。即ち、「専心 determination, 勇気 courage, 平等 equality, インスピレーション inspiration」の4つである¹⁹⁾。実は、ここには大きな疑問が生ずると言っても良い。本当にオリンピックとパラリンピックは別の価値があるのであろうか？ 実際には、パラリンピアンもオリンピックの価値の下に人生を送っているはずであるし、オリンピアンもパラリンピックの価値を大切に生きているはずである。両者を区別する意味があるのであろうかという問いが定立できる。このような精神文化として代表的なオリンピックとパラリンピックの価値という無形のレガシーに関する考察も未だ未着手の課題である。

このような発展的な問題は、オリンピック・レガシー研究の次なる課題として残されているのである。

<付記>

本論考は2013年日本体育学会および国際スポーツ哲学学会の口頭発表を基に大幅に加筆したものである。また、本研究は科学研究費基盤研究費（C）課題番号23500745の補助を受けた研究の一環である。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 例え ば、IOC (2012) Factsheet: London 2012 Facts & Figures. IOC, IOC (2013) Olympic Legacy. IOC, University of East London (2010) . Olympic Games Impact Study – London 2012 Pre-Games Report. UEL (University of East London) 参照. また、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会開催決定を受けて、オリンピック・レガシーに関する出版も我が国で見られるようになった。例えば、間野義之 (2013) オリンピック・レガシー：2020年東京をこう変える！. ポプラ社. この中にも2012年ロンドン大会のレガシー分析が含まれている。
- ²⁾ 例え ば、IOC (2013) のハンドブックである“Olympic Legacy”にはオリンピック・レガシーとしてポジティブなレガシーの記載しかないこともそのようなIOCの意図を推し量る材料の一つであると考えられる。あるいは、荒牧による招致候補都市の招致ファイルとIOC評価委員会の評価レポートの分析においても、各候補都市のレガシー記述にマイナスの否定的なレガシーへの言及がほとんど無いことからIOCの意図が推察できよう。荒牧重依 (2013). 第30回オリンピック競技大会招致関連資料からみるオリンピック・レガシー. 体育学研究, 58:1-17. 参照.
- ³⁾ 寒川のスポーツ人類学の概念を援用。彼は、全体としてのスポーツ文化を「精神文化」「社会文化」「技術（物質）文化」に3分するのが一般的であるという。さらに本稿では、この寒川の「スポーツ文化複合論」に依拠しつつも、スポーツ文化の構造を「精神文化」「身体文化」「社会文化」の3側面の総合的かつ相互依存関係にあるとして、スポーツ映像文化を文化論的に論じている舛本のスポーツ文化の複合的構造論に依拠

した。さらに、本稿では、このような3側面の包括する概念を、オリンピック事象全体が指すスポーツ競技やボランティアなど幅広い行動を包括する概念として用いるために「身体文化側面」を「行動文化側面」に、また、オリンピックのような広範に及ぶ社会事象に敷衍し、さらにその再生産システムがイメージしやすい用語にするために、「社会文化」を「制度文化」と改称して用いている。寒川恒夫 (1994)。スポーツ文化複合。寒川恒夫編著。スポーツ文化論。杏林書院, pp.18-24. および舩本直文 (2000) スポーツ映像のエピステーメー：文化解釈学の視点から。新評論, pp.287-291. 参照。

⁴⁾ IOC (2003) . The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000. IOC

⁵⁾ IOC (2011) . オリンピック憲章第1章第2条第14項, 2011年版, p.14. <http://www.joc.or.jp/olympism/charter/> (2014.08.03 閲覧)

⁶⁾ Olympic Review (2006) WHAT IS THE OLYMPIC GAMESGLOBAL IMPACT STUDY? No.61. http://www.olympic.org/Documents/Reports/EN/en_report_1077.pdf (2014.10.03 閲覧)

⁷⁾ 同上

⁸⁾ バンクーバー組織委員会とロンドン組織委員会の以下の OGI 報告書参照。Vancouver Organizing Committee for the 2010 Olympic and Paralympic Winter Games (VANOC) . Olympic Games Impact Program Baseline Report (2010 Vancouver) , October 2007. http://www.bceohrn.ca/files/images/OGI_Baseline_Report_07_10_12.pdf および London Organizing Committee of the Olympic Games and Paralympic Games (LOCOG) . Olympic Games Impact Study – London 2012 Pre-Games Report. University of East

London (UEL) and the Thames Gateway Institute for Sustainability, October 2010. http://www.uel.ac.uk/geoinformation/documents/UEL_TGIIfS_PreGames_OGI_Release.pdf なお、OGI の背景や分析については、Homma, K. and Masumoto, N. (2013) . A theoretical approach for the Olympic legacy study focusing on sustainable sport legacy. The International Journal of the History of Sport. 30-12, 1455-1471, DOI:10.1080/09523367.2013.825251 を参照。

⁹⁾ バンクーバー組織委員会のベースライン報告書では126だが、ロンドン組織委員会の大会前報告書では120項目となっている。詳細については、上記注8掲載の Homma and Masumoto 参照。

¹⁰⁾ International Olympic Committee (IOC) . Technical Manual on Olympic Games Impact, 5th Update Cycle – Post Vancouver Winter Games. IOC, 2011. および注8の Homma and Masumoto 参照。

¹¹⁾ 例えば、2012年大会の各招致都市の招致資料におけるオリンピック・レガシーを分析した荒牧 (2013) は、無形のレガシーがより長期的な有形のレガシーの原動力になるという関係に着目している。一方、Homma and Masumoto (2013) は、持続可能なスポーツレガシー形成のための理論的アプローチを検討する研究において、オリンピックのレガシーが関心を集めるようになった時代的背景や、OGI など既存のスポーツレガシー研究の課題を挙げたうえで、スポーツレガシーの形成にはスポーツ政策の関与が重要であることを指摘している。そして、政策という「制度」とスポーツ参加という「行動」、さらに価値観といった「精神性」の3つの側面から分析することを提案している。

- 12) Cashman, R. (2003) . What is “Olympic Legacy”? in IOC (2003) . The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000. IOC, pp. 31-42.
- 13) IOC (2013) . Olympic Legacy. IOC
- 14) 例えば、オリンピック開催によるスポーツ参加の向上を有形のレガシーと考えるか無形のレガシーと捉えるかという問題がある。海外のオリンピック研究者にインタビューを行ったところ、その現象自体に形はないものの、スポーツ参加率という数字で捉えるならスポーツ参加は有形のレガシーであると考えた研究者がいた（インタビュー内容については本間（2014）の未公開博士論文「Contribution of Sport Policy to Sport Legacy Development: Case of the Sydney 2000 Olympic Games」による）。先行研究において特定のレガシーを有形か無形か議論しているものは特に見られないが、有形・無形という分類を含めてレガシーを正確に分類するのは難しいという指摘は複数の研究者やIOCから出ている。
- 15) IOC (2003), 前出注4, p.492.
- 16) 「スポーツは、世界共通の人類の文化である」と定める「スポーツ基本法」しかり。また、佐藤臣彦はスポーツを文化としてとらえ、形態、体力、技能などの「身体的契機」、ルールや戦術などの「知的契機」およびプレーの良さや美などの「感性的契機」からなる文化であるとしている。ここには、スポーツが文化として再生産されていく制度文化的側面とそれを支える精神文化的側面という視点が不十分であると考えられる。文部科学省（2011）スポーツ基本法, (Web版. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm) および佐藤臣彦（1991）体育とスポーツの概念区分に関するカテゴリー論的考察, 体育原理研究, 22:1-12. 参照。
- 17) 上述注3, 寒川恒夫（1994）. スポーツ文化複合を参照。
- 18) IOC の Factsheet 参照. IOC (2014) Factsheet: Olympic Values Education Programme (OVEP) (Update - January 2014) http://www.olympic.org/Documents/Reference_documents_Factsheets/Olympic_Values_Education_Programme.pdf (2014.08.03 閲覧)
- 19) 2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック大会組織委員会 (LOCOG) の website は閉鎖されているため British Council の website: <https://schoolsonline.britishcouncil.org/warm-up-for-the-games/competition-theme-2>, および国際パラリンピック委員会 (IPC) の website : <http://www.paralympic.org/the-ipc/about-us> を参照のこと. (2014.08.03 閲覧)

受付 2014年8月18日
受理 2014年10月9日